

第3回 高知県建設業活性化検討委員会 概要

日時：令和3年7月19日（月）13時30分～15時30分

場所：高知城ホール 4階 多目的ホール

正木委員：土木工事1日体験の参加者数は、想定していた人数か。

事務局（坂本副部長）：高知支部は、一定数集まると考えていたが、安芸支部と幡多支部は一桁を想定していた。しかし、ありがたい事に想定を超える応募をいただいた。

磯部委員長：チラシにあるドローンの操縦体験がおもしろそうに見えたのではないか。

正木委員：資料4-2の23ページにあるNo.8の奨学金対象の大学生は、県内出身の学生と県外出身の学生のどちらを想定しているのか。

事務局（坂本副部長）：県内出身者が高知県に帰ってくることが多いと想定しているが、県内出身者に限ったものではなく、県外出身者でもかまわないと考えている。

磯部委員長：資料4-2の11ページで、中学生の100名前後が県内の工業高校に進学し、高校生の約100人が県内の土木建設業に入職している。30名程度が県外の建設業者へ出ているということは、その差は、普通科などから入職しているということか。

事務局（坂本副部長）：数字を見るとそのように推測できるが、高岸委員が以前説明していた話によると、入職の割合は工業系高校から50名程度、その他普通科などから50名程度と聞いている。

磯部委員長：そういうことであれば、働きかけは土木科、普通科関係なく行うべきであろう。県外の就職としては東京の人数が多いが、Uターンしている人を見ると、関西圏からの30代・40代が多いというデータが出ている。その辺のU・Iターンで高知に来たい人がターゲットになるのではないか。

井上委員：高校生の就職者数でいうと、土木系は、ほとんど土木系にいく傾向がある。今回の「土木工事1日体験」の参加者一覧表を見ると普通科の高校生も参加してくれている。普通科の生徒には、土木の知識がなくても、基礎の数学、物理が分かっていたら大丈夫ということを1日体験の説明会で伝えてもらいたい。資格取得は入ってからでも十分に間

に合う。

当社では、津野町などで、工事現場のある各地域の小学校に行き、プログラミング教室等の活動を行っている。その中で、「警察官か自衛官になりたかったけど、建設業に入りたいと思った。」と言ってくれた児童がいた。今後もドローンやSDGsといった取組も絡めながらそうした教室を開き、小学生の時から啓発できれば良いと考える。

磯部委員長：（欠席した）奥村委員の意見（の事務局からの報告）に対して、女性、男性という言葉が出てこないことが理想である。しかし、現状ではトイレや更衣室などどうしても欠けているものがあり、女性を特別扱いするということではなく、足りないものをきちんと補っていかねばいけない。

古木委員：外国人を雇用して、どうDXに結びつくのかを提案したい。DXの推進で言うと、県内のコンサルタント会社で、3DCAD設計者にアジアの若者を雇用した会社がある。高知県内での更なる高度人材の確保に向けて、事例調査に東京の高度人材を雇用している大手建設会社へヒアリングに行く準備をしている。

また、大学生向けに「中小企業の魅力」を発信していく事も重要である。そして、最終的には高校生、中学生、さらには幼稚園児や小学生とその保護者も含めて情報を発信していくことが必要だと考える。

正木委員：前回の検討会で、職場体験として、伊野中学校の生徒2名を中央西土木事務所に3日間受け入れてもらった話をさせていただいた。実際に職場体験に行った生徒に話を聞くと、行く前は、男性ばかりの職場で怖いイメージがあったが、行ってみると、想像以上に女性が多く、皆さんに親切にしてもらったので、土木系に進学すると決めたということだった。どの段階で、どういうアプローチをするかが大事ではないか。

生徒数が減少していく中、人材をどう確保をしていくかが課題であり、建設業だけでなく、教育として1本の柱が必要である。現在、学校現場はありとあらゆるものを求められている。どの分野からどのような力が借りられるかを、コンパクトに求めていくべき。「教育委員会と協議して、PTA総会で動画のPR」はよいが、中身はコンパクトでシンプル

にして高知県の全体像を出してほしい。

熱海市の災害のテレビ放送を見ても、地域に若者がいないと報道されていた。高知県も地域に若者をどう定住させていくかが課題である。取組事例として、医師就業者の給付型奨学金がある。6年間給付をもらうと、その1.5倍の9年間高知で勤務すれば返済不要となるものであり、それにより医師が高知に定着している。経済状況が大変な中、奨学金の対象を高校生にも広げてもらえれば、中学生も選択肢が広がると考える。

西川委員：新たなプランは、11月で最終案となるが、令和5年度までの目標値は、主体となる団体は黄色で表しているが、時期や手段について、より詳細な情報を今後示していくのか。

事務局（坂本副部長）：資料の第3章（4）の推進体制と進捗管理にあるように、一つは、取組の成果を測る数値等の例として、目標値、参考数値、取組結果（参加者数等）、取組への参加者アンケート、毎年9月頃に実施する建設業協会会員へのアンケート及び10月頃に開催する建設業協会各支部との意見交換会の意見概要などを基に、来年7月頃に開催予定の検証委員会に報告し、委員の皆様からご意見をもらうこととしている。

それから、資料4-2の第3章（3）強化する取組と役割分担、優先順位の資料をさらに落とし込んだ資料を県の事務局と建設業協会の事務局で作成している。具体的には、担当者名が入ったもので、誰が、いつまでにといった資料を作成して、具体的な協議を進めている。それをそのまま会議でお示しできるかは考える必要があるが、もう一段詳しいもので進捗管理していく予定である。

西野委員：我々には、色々な使命感がある。建設業として、未来にプレゼントできるようなものができればと思う。しかし、我々が色々やると手厳しい意見も出てくる。建設業は無くてはならないと言われながらも、親が子どもに、「そんな事では（建設業で働いている）父親みたいになるよ。」と言われるような側面もある。

井上委員の話を聞いていて、女性でインパクトのある方が業界に入ると、男性もつられて入ってもらえれば。もっともっとできる部分がある。小さい子供も、女性もできるとい

う目で見てもらえれば。我々もこの検討委員会などを通じ、皆さんにお知恵をいただいて、仕込みの仕方を教えていただきながら、頑張っていきたい。

磯部委員長：全体のことになるが、高知県の土木建設業は、全国の中でも仕事が多いところであり、若い人が入っても一生分の仕事がある。四国8の字ネットワークや防災対策、津波対策など、仕事の量は無限大。水害に対する河川改修工事もたくさんある。おそらく、地球温暖化対策による海面上昇を考慮して、これから河川も降水量を1.1倍にして洪水対策を見直していくこととなる。仕事は、山ほどあるのにプランの中には、出てこない。

もし、土木業界に入れば、こんな事をやらなければならない、この位の仕事量がありますという、この視点も取り入れていった方が良いのではないか。

道路、河川などの工事がたくさんあることを説明するのに、道路計画、河川計画があると思うが、子供用のものがない。子供たちが見て、わかりやすいものがあれば良いと思う。

労働環境を良くしていくことも当然、必要である。高知県は生活環境が良い場所である。住居費が、大都会と比べてどうか等、県庁としてはまとめていると思う。都会ならば、海水浴に電車で2時間かけて行くところを、高知県なら海・山・川まで30分で行けるといった生活環境の良さをピーアールしてもよいのではないか。

中学生向けのパンフレットにある「廣井勇」の掲載はよいと思う。歴史的なことをいっても、実際は子供たちには受けないかもしれないので、これは私の思いということですが、廣井勇が建設した小樽港や野中兼山によって造られた八田堰とか、現代の土木技術にも通じる、高知県が生んだ土木の偉人などインパクトがあることを言ってもよいのではないか。何かしらうまい宣伝材料を作らないといけないと考える。

西川委員：今回のプランと直接は関係ないが、今後、大きく問題となるのが、経営者の後継者問題である。事業承継やM&Aなど地域社会を担う経営者、業者数がどのようにバトンタッチしていくのか、今後どうなるかと思う。

井上委員：資料4-2の23ページ12番の「働き方改革や女性活躍に繋がる取組など、労働環境の改善に取り組む事業者に対し、入札参加資格や総合評価で優遇する制度を検討す

る。」とあるが、20代前半の若手の技術者全体に焦点を当ててほしい。女性に限らずに若手というくくりが良いのではないか。

古木委員：動画による魅力発信が中心となっている。競争と協調の領域が企業にはある。協調領域として、偉大な先駆者は業界全体として伝えていくべきこと。それと、移住者への魅力PRとして、サーフィンや釣りができるから幡多に来た人がいる。そういった魅力も含めて、高知の建設業界の魅力を情報発信したらどうか。

正木委員：県外への情報発信は、今がまさにチャンス。少し前になるが、「高知が好きなんです」といった蒼井優と山ちゃんの記者会見であるとか、「竜とそばかすの姫」の聖地としてとか、活用できる素材はある。

磯部委員長：外国人労働者については、活動できる範囲、利用できる範囲は狭いといった問題がある。さらに深めていけば、外国人と結婚して学校はどうするかとか、外国人労働者の現状で困っていることについて、古木委員にお話しいただきたい。

古木委員：具体的には、建設業においては、とびと型枠の作業をしたくてもとびで入ればとびしかできない。地方の建設業者においては、とびや型枠など、色々な仕事ができる多能工的に働けないといけないので、そうした部分の課題がある。(以上)